漱石全集

三卷

坊ちゃん外七篇

全三十五巻　第三回配本

漱石全集　第三巻
定價　九〇〇圓

一九五六年八月二七日　第一刷發行
一九七九年一月八日　第七刷發行

著者　夏目漱石

東京都千代田區一ツ橋二―五―五
發行者　綠川亨

東京都青梅市根ケ布一―三八五
印刷者　青木勇

發行所　東京都千代田區一ツ橋二―五―五　株式會社　岩波書店
電話〇三(二六五)四一一一　振替東京六―二六二四〇

精興社印刷・三水舍製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

明治二十九年三月撮影
(松山中學校卒業式記念)

目次

倫敦塔　三
カーライル博物館　二七
幻影の盾　三九
琴のそら音　七一
一夜　一〇五
薤露行　一一七
趣味の遺傳　一四九
坊つちやん　二〇三
解説　三三五
注解　三三九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

倫敦塔

—明治三八、一、一〇—

二年の留學中只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行かうと思つた日もあるが止めにした。人から誘はれた事もあるが斷つた。一度で得た記憶を二返目に打壞はすのは惜しい、三たび目に拭ひ去るのは尤も殘念だ。「塔」の見物は一度に限ると思ふ。

行つたのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理抔は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の眞中へ拋り出された樣な心持ちであつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家に歸れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。此響き、此群集の中に二年住んで居たら吾が神經の纖維も遂には鍋の中の麩海苔の如くべと〳〵になるだらうとマクス、ノルダウの退化論を今更の如く大眞理と思ふ折さへあつた。

しかも余は他の日本人の如く紹介狀を持つて世話になりに行く宛もなく、又在留の舊知とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地圖を案内として毎日見物の爲め若くは用達の爲め出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乘らない、馬車へも乘れない、滅多な交通機關を利用仕樣とすると、どこへ連れて行かれるか分らない。此廣い倫敦を蜘蛛手十字に往來する汽車も馬車も電氣鐵道も鋼條鐵道も余には何等の便宜をも與へる事が出來なかつた。余は已を得ないから四ツ角へ出る度に地圖を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地圖で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時は又外の人に尋ねる、何人でも合點の行く人に出逢ふ迄は捕へては聞き呼び掛けては聞く。かくして漸く

わが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのは恰も此方法に依らねば外出の出來ぬ時代の事と思ふ。來るに來所なく去るに去所を知らずと云ふと禪語めくが、余はどの路を通つて「塔」に着したか又如何なる町を横ぎつて吾家に歸つたか未だに判然しない。どう考へても思ひ出せぬ。只「塔」を見物した丈は慥かである。「塔」其物の光景は今でもあり〳〵と眼に浮べる事が出來る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稲妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の燒點の様だ。

倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆しまに戻つて古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り殘されたるは倫敦塔である。

此倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てゝ眼の前に望んだとき、余は今の人か將た古への人かと思ふ迄我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初めとはいひながら物靜かな日である。空は灰汁桶を搔き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いて居るかと思はるゝ。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつ迄も同じ所に停つて居る様である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて艪を漕ぐ、是も殆んど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちら〳〵する、大方鷗であらう。見渡した處凡ての物が靜かである、物憂

げに見える、眠つて居る、皆過去の感じである。さうして其中に冷然と二十世紀を輕蔑する樣に立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有らん限りは我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つて居る。其偉大なるには今更の樣に驚かれた。此建築を俗に塔と稱へて居るが塔と云ふは單に名前のみで實は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして前世紀の紀念を永劫に傳へんと誓へる如く見える。*九段の遊就館を石で造つて二三十並べてそうして其を虫眼鏡で覗いたら或は此「塔」に似たものは出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和した空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾が腦裏に描き出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ烟りの寐足らぬ夢の尾を曳く樣に感ぜらるゝ。暫くすると向ふ岸から長い手を出して余を引張るかと怪しまれて來た。今迄佇立して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行き度くなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐい〳〵牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門*迄馳せ着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鐵屑を吸收し了つた。門を入つて振り返つたとき、

*憂の國に行かんとするものは此門を潜れ。
永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくゞれ。
*迷惑の人と伍せんとするものは此門をくゞれ。
正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初
愛は、*われを作る。
我が前に物なし只無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

といふ句がどこぞで刻んではないかと思つた。余は此時既に常態を失つて居る。

空濠にかけてある石橋を渡つて行くと向ふに一つの塔がある。是は丸形の石造で石油タンクの狀をなして恰も巨人の門柱の如く左右に屹立して居る。其中間を連ねて居る建物の下を潜つて向へ拔ける。中塔とは此事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。眞鐵の盾、黑鐵の甲が野を蔽ふ秋の陽炎の如く見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黑き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出づる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なりとて蟻の如く塔下に押し寄せて犇めき騷ぐときも亦塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に鳴らし、ある時は無三に鳴らす。祖來る時は祖を殺しても鳴らし、佛來る時は佛を殺しても鳴らした。霜の朝、雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今いづこへ行つたものやら、余が頭をあげて苔に古りたる櫓を見上げたときは寂然として既に百年の響を收めて居る。

又少し行くと右手に逆賊門がある。門の上には聖タマス塔が聳えて居る。逆賊門とは名前からが既に恐ろしい。古來から塔中に生きながら葬られたる幾千の罪人は皆舟から此門迄護送されたのである。彼等が舟を捨てゝ一度び此門を通過するや否や娑婆の太陽は再び彼等を照らさなかつた。テームスは彼等にとつての三途の川で此門は冥府に通ずる入口であつた。彼等は涙の浪に搖られて此洞窟の如く薄暗きアーチの下迄漕ぎ付けられる。口を開けて鰯を吸ふ鯨の待ち構へて居る所迄來るや否やキーと軋る音と共に厚樫の扉は彼等と浮世の光りとを長へに隔てる。彼等はかくして遂に宿

命の鬼の餌食となる。明日食はれるか明後日食はれるか或は又十年の後に食はれるか鬼より外に知るものはない。此門に横付につく舟の中に坐して居る罪人の途中の心はどんなであつたろう。櫂がしわる時、雫が舟縁に滴たる時、漕ぐ人の手の動く時毎に吾が命を刻まるゝ様に思つたであらう。白き髯を胸迄垂れて寛やかに黒の法衣を纏へる人がよろめきながら舟から上る。是は大僧正クランマーである。青き頭巾を眉深に被り空色の絹の下に鎖り帷子をつけた立派な男はワイアットであらう。是は會釋もなく舷から飛び上る。はなやかな鳥の毛を帽に挿して黄金作りの太刀の柄に左の手を懸け、銀の留め金にて飾れる靴の爪先を、輕げに石段の上に移すのはローリーか。余は暗きアーチの下を覗いて、向ふ側には石段を洗ふ波の光の見えはせぬかと首を延ばした。水はない。逆賊門とテームス河とは堤防工事の竣功以來全く縁がなくなつた。幾多の罪人を呑み、幾多の護送船を吐き出した逆賊門は昔しの名殘りに其裾を洗ふ笹波の音を聞く便りを失つた。只向ふ側に存する血塔の壁上に大なる鐵環が下がつて居るのみだ。昔しは舟の纜を此環に繋いだといふ。

左りへ折れて血塔の門に入る。今は昔し薔薇の亂に目に餘る多くの人を幽閉したのは此塔である。草の如く人を薙ぎ、鷄の如く人を潰し、乾鮭の如く屍を積んだのは此塔である。血塔と名をつけたのも無理はない。アーチの下に交番の様な箱があつて、其側らに甲形の帽子をつけた兵隊が銃を突いて立つて居る。頗る眞面目な顔をして居るが、早く當番を濟まして、例の酒鋪で一杯傾けて、一件にからかつて遊び度いといふ人相である。塔の壁は不規則な石を疊み上げて厚く造つてあるから表面は決して滑ではない。所々に蔦がからんで居る。高い所に窓が見える、建物の大きい所爲か下から見ると甚だ小い。鐵の格子がはまつて居る様だ。

番兵が石像の如く突立ちながら腹の中で情婦と巫山戯て居る傍らに、余は眉を攢め手をかざして此高窓を見上げて佇ずむ。格子を洩れて古代の色硝子に微かなる日影がさし込んできら〳〵と反射する。やがて烟の如き幕が開いて空想の舞臺があり〳〵と見える。窓の内側は厚き戸帳が垂れて畫もほの暗い。窓に對する壁は漆喰も塗らぬ丸裸の石で隣りの室とは世界滅却の日に至るまで動かぬ仕切りが設けられて居る。只其眞中の六疊許りの場所は冴えぬ色のタペストリで蔽はれて居る。地は納戸色、模様は薄き黄で、裸體の女神の像と、像の周圍に一面に染め拔いた唐草である。石壁の横には、大きな寢臺が横はる。厚樫の心も透れと深く刻みつけたる葡萄と、葡萄の蔓と葡萄の葉が手足の觸るゝ場所丈光りを射返す。此寢臺の端に二人の小兒が見えて來た。一人は十三四、一人は十歳位と思はれる。幼なき方は床に腰をかけて、寢臺の柱に半ば身を倚たせ、力なき兩足をぶらりと下げて居る。右の肱を、傾けたる顏と共に前に出して年嵩なる人の肩に懸ける。年上なるは幼なき人の膝の上に金にて飾れる大きな書物を開げて、其あけてある頁の上に右の手を置く。象牙を揉んで柔かにしたる如く美しい手である。二人とも烏の翼を欺く程の黑き上衣を着て居るが色が極めて白いので一段と目立つ。髮の色、眼の色、偖は眉根鼻付から衣裝の末に至る迄兩人共殆んど同じ様に見えるのは兄弟だからであらう。

兄が優しく清らかな聲で膝の上なる書物を讀む。

「我が眼の前に、わが死ぬべき折の様を想ひ見る人こそ幸あれ。日毎夜毎に死なんと願へ。やがては神の前に行くなる吾の何を恐るゝ……」

弟は世に憐れなる聲にて「アーメン」と云ふ。折から遠くより吹く木枯しの高き塔を撼がして一度びは壁も落つる許りにゴーと鳴る。弟はひたと身を寄せて兄の

肩に顔をすり付ける。雪の如く白い蒲團の一部がほかと膨れ返る。兄は又讀み初める。

「朝ならば夜の前に死ぬと思へ。夜ならば翌日ありと頼むな。覺悟をこそ尊べ。見苦しき死に様ぞ恥の極みなる……」

弟又「アーメン」と云ふ。其聲は顫へて居る。兄は靜かに書をふせて、かの小さき窓の方へ歩みよりて外の面を見様とする。窓が高くて脊が足りぬ。床几を持つて來て其上につまだつ。百里をつゝむ黑霧の奥にぼんやりと冬の日が寫る。屠れる犬の生血にて染め拔いた様である。兄は「今日も亦斯うして暮れるのか」と弟を顧みる。弟は只「寒い」と答へる。「命さへ助けて呉るゝなら伯父様に王の位を進ぜるものを」と兄が獨り言の様につぶやく。弟は「母様に逢ひたい」とのみ云ふ。此時向ふに掛つて居るタペストリに織り出してある女神の裸體像が風もないのに二三度ふわり〳〵と動く。

忽然舞臺が廻る。見ると塔門の前に一*人の女が黑い喪服を着て悄然として立つて居る。面影は靑白く窶れては居るが、どことなく品格のよい氣高い婦人である。やがて錠のきしる音がしてぎいと扉が開くと内から一人の男が出て來て恭しく婦人の前に禮をする。

「逢ふ事を許されてか」と女が問ふ。

「否」と氣の毒さうに男が答へる。「逢はせまつらんと思へど、公けの掟なれば是非なしと諦め給へ。私の情賣るは安き間の事にてあれど」と急に口を緘みてあたりを見渡す。濠の内からかいつぶりがひよいと浮き上る。

女は頸に懸けたる金の鎖を解いて男に與へて「只束の間を垣間見んとの願なり。女人の頼み引き受けぬ君はつれなし」と云ふ。

男は鎖りを指の先に卷きつけて思案の體である。か

いつぶりはふいと沈む。やゝありていふ「牢守りは牢の掟を破りがたし。御子等は變る事なく、すこやかに月日を過させ給ふ。心安く覺して歸り給へ」と金の鎖りを押戻す。女は身動きもせぬ。鎖ばかりは敷石の上に落ちて鏘然と鳴る。

「如何にしても逢ふ事は叶はずや」と女が尋ねる。

「御氣の毒なれど」と牢守が云ひ放つ。

「黑き塔の影、堅き塔の壁、寒き塔の人」と云ひながら女はさめ〴〵と泣く。

舞臺が又變る。

丈の高い黑裝束の影が一つ中庭の隅にあらはれる。苔寒き石壁の中からスーと拔け出た樣に思はれた。夜と霧との境に立つて朦朧とあたりを見廻す。暫くすると同じ黑裝束の影が又一つ陰の底から湧いて出る。櫓の角に高くかゝる星影を仰いで「日は暮れた」と脊の高いのが云ふ。「晝の世界に顏は出せぬ」と一人が答へる。「人殺しも多くしたが今日程寐覺の惡い事はまたとあるまい」と高き影が低い方を向く。「タペストリの裏で二人の話しを立ち聞きした時は、いつその事止めて歸らうかと思ふた」と低いのが正直に云ふ。「絞める時、花の樣な唇がぴり〴〵と顫ふた」「透き通る樣な額に紫色の筋が出た」「あの唸つた聲がまだ耳に付いて居る」。黑い影が再び黑い夜の中に吸ひ込まれる時櫓の上で時計の音ががあんと鳴る。

空想は時計の音と共に破れる。石像の如く立つて居た番兵は銃を肩にしてコトリ〴〵と敷石の上を歩いて居る。あるき乍ら一件と手を組んで散歩する時を夢みて居る。

血塔の下を拔けて向へ出ると奇麗な廣場がある。其眞中が少し高い。其高い所に白塔*がある。白塔は塔中の尤も古きもので昔しの天主である。竪二十間、横十八間、高さ十五間、壁の厚さ一丈五尺、四方に角樓が

聳えて所々にはノーマン時代の銃眼さへ見える。千三百九十九年國民が三十三ケ條の非を擧げてリチヤード二世に讓位をせまつたのは此塔中である。僧侶、貴族、武士、法士の前に立つて彼が天下に向つて讓位を宣告したのは此塔中である。爾時讓りを受けたるヘンリーは起つて十字を額と胸に畫して云ふ「父と子と聖靈の名によつて、我れヘンリーは此大英國の王冠と御代とを、わが正しき血、惠みある神、親愛なる友の援を藉りて襲ぎ受く」と。偖先王の運命は何人も知る者がなかつた。其死骸がポント、フラクト城より移されて聖ポール寺に着した時、二萬の群集は彼の屍を繞つて其骨立せる面影に驚かされた。或は云ふ、八人の刺客がリチヤードを取り卷いた時彼は一人の手より斧を奪ひて一人を斬り二人を倒した。去れどもエクストンが背後より下せる一擊の爲めに遂に恨を呑んで死なれたと。或る者は天を仰いで云ふ「あらず〳〵。リチヤードは斷食をして自らと、命の根をたゝれたのぢや」と。何れにしても難有くない。帝王の歴史は悲慘の歴史である。

階下の一室は昔しヲルター、ロリーが幽囚の際萬國史の草を記した所だと云ひ傳へられて居る。彼がエリザ式の半ヅボンに絹の靴下を膝頭で結んだ右足を左りの上へ乘せて鵞ペンの先を紙の上へ突いたまゝ首を少し傾けて考へて居る所を想像して見た。然し其部屋は見る事が出來なかつた。

南側から入つて螺旋狀の階段を上ると茲に有名な武器陳列場がある。時々手を入れるものと見えて皆ぴか〳〵光つて居る。日本に居つたとき歴史や小說で御目にかゝる丈で一向要領を得なかつたものが一々明瞭になるのは甚だ嬉しい。然し嬉しいのは一時の事で今では丸で忘れて仕舞つたから矢張り同じ事だ。只猶記憶に殘つて居るのが甲冑である。其中でも實に立派だと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com